

特集

私の薦める、私の一冊

「読書の秋」というのには、あまりにも短すぎた今年の秋、ならば、「読書の冬」と洒落てみましょう！そんなわけで、教員のみなさん+図書館の方にお薦めの本を紹介していただきました。銘打って「私の薦める、私の一冊」。1冊に止まらず、複数冊ご推薦いただいたものもあります。お忙しいなか編集委員会の求めに応じていただいたみなさんには心より感謝申し上げます。

若い人たち、しかも大学生の読書離れが指摘されてすでに久しくなっています。さらにこのところ、いたるところで携帯・スマホの操作に夢中になっている人たちを見ると、この先どんな社会になっていくのかと、ふとそんな不安な気持ちがすることもあります。そうしたせい、駅で、車内で、あるいは図書館で、静かに本を開いている人を見つけると、ホッとします。

本との出会いは、人との出会いに優るとも劣らないと言います。若い頃の様々な書物との出会いは、その後の人生に深みと奥行きを与えてくれるはずで。あえて「良き本」に出会えとは言いません。「悪友」同様に「悪き本」も読みようによっては、何がしかを与えてくれることもあります。むしろそうした価値判断ができる自分自身をつくりあげていく手だてとなるばあいもあります。

若い頃に読んだ本を思い出すと、不思議なことに、その頃の自分の心の風景、人間関係、時代状況などと複雑に絡み合いつつ思い出されてきます。これもまた読書の効用と言うべきでしょうか。

近年は、電子書籍も普及しはじめ、読書の形態も多様化しつつありますが、個人的にはやはり紙の本が捨てがたい思いです。とはいえ、みなさんには、電子書籍であろうと「紙書籍」であろうと、ぜひとも書物の大海に乗り出してほしいと思います。そのための手がかりとして、この特集が役立つことを願っています。読書という体験をこれからの人生の糧に、そして貴重な思い出にしてみてください！

なお、この特集でご推薦いただいた本については、図書館にまとめて置くコーナーを設けていただくことを考えております。また、次号以降の本誌上にも、推薦書欄を設けていきたいと考えておりますのでご期待ください。

KPU^{NEWS}編集委員長 鈴木 栄樹

薬品化学分野 教授 赤路 健一

「ヒトは見たいものしか見ないし、聞きたいことしか聞かない」。最初にこう言ったのが誰かは知らないが、少なくともカエサルはこれと同じ内容の一文を残しているそうである。ローマの帝政が始まる直前である。その後ゆうに千年以上忘れられていたそうだが、これを再発見したのがマキャヴェッリだそうである。いわゆるルネッサンスのころである。中世のキリスト教徒はこの言葉を聴きたくなかったようである。

「これだけは見たい、これは聞いておきたい」という気があまりないせいか、これまで読んだ本でこの一冊というのは正直、無い。でも読んだことが残っているのはどうやら古い本や古いことを書いた本が多いようである。もちろん文章を覚えているわけでも、有名なさわりを覚えているわけでもない。「このときあの人はこちらした、こうなった」というようなことがおぼろげに残っている。文明は驚異的に進んだが、人間の本質はあまり変わっていないように思う。

ありがたいことに今の時代、欲するものは何でも手に入る（ようである）。それでも時間を買うのは難しい。時代にマッチしたベストセラーを否定する

気はさらさらないが、今に残る古典にはあらゆるものが詰まっている。受験勉強を終わらせ、世の現実にはさらされるまでのかけがえのないこの時期、昔の本を読むのも悪くない。大学を出て10年、20年たてば納得できることが書いてある（ように思う）。声高に教養主義を主張する気はないが、時の試練に耐えた本質だけが現実の対処に役立つのではないか。

どんな分野でもかまわない。世に言う古典を読み散らかせば「見えなかったものが見え、聞けなかったことが聞ける」（だろう、たぶん）。自らの乏しい経験を補うのはこれが一番ではなかったかと今になって後悔している。

（参考までに、カエサルは『ガリア戦記』（岩波文庫、講談社学術文庫）、マキャヴェッリは『君主論』（岩波文庫、中公文庫BIBLIO）という本を書いている）

病態生理学分野 教授 芦原 英司

マイケル・サンデル著 『ハーバード白熱教室講義録+東大特別講義録』上・下 早川書房 2012年

「哲学者」とよばれる多くの先達たちは、それぞ

れの考え方を「哲学」という学問として体系づけている。「哲学」と聞くだけで難解で取っつきにくい学問、頭の固い超越した学者のみが楽しむ趣味のような学問と考えがちであるが、実はそうではなく、哲学とは日常の生活・行動の根拠を示した学問で、私たちは何かトラブルに遭遇したとき、正に先達たちが体系づけた「哲学」的思想に基づいた行動で対処している。このことをマイケル・サンデル教授は、身近な、時に極端なテーマで学生たちに問題提起し、議論させ気づかせている。その講義内容をまとめたものが「ハーバード白熱教室講義録」である。この講義風景はNHKテレビで取り上げられていたので、多くの学生諸君はご存じのことと思われるが、一度文字を通して臨場感あふれる講義風景を楽しんでみてはいかがだろうか。

君たちは、薬剤師国家試験に合格後、薬剤師免許を取得し社会に羽ばたいていき、社会の中で様々な人とコミュニケーションを取り仕事をしていくが、学生時代に教わった基本的なコミュニケーション術では十分な人間関係は成り立たず、コミュニケーションの取り方の難しさや大切さを改めて感じるはずである。大切なことは、人それぞれ考え方や生き方には違いがあり、この社会は“多様な”人間の集合体であるということ認識し、個々人の考え方を尊重して付き合っていくことである。マイケル・サンデル教授の白熱講義に参加し、サンデル教授の提起した問題を自分たちでも考え、また君たちと同年代の学生たちの考え方を感ずるとともに、「人間の多様性」を感じてもらいたい。

社会は様々な考えを持つ様々な人間の集合体である。多様な人間一人一人を尊重し、付き合っていくことで人間関係を構築し、一人前の社会人・薬剤師として成長していただきたい。

微生物・感染制御学分野 教授 後藤 直正

開高健著 『輝ける闇』 新潮文庫 1982年、『夏の闇』 新潮文庫 1983年

～ 入ってきて人生と叫び、出て行って死と叫ぶ ～

1960年代後半、私の高校生のころのTVニュースの多くが、南北ベトナム間の戦争の報道から始まった。ナパーム弾が落下し、寒村を兵士が焼き尽くす。ゲリラ兵士が地面の小穴を出入りする、人々は泣き、訴え、逃げまどう。今年8月に来日したオリバー・ストーン監督が兵士としての実体験にもとづいて製作した映画「プラトーン」(1986年公開)をモノクロで観ていたようなものであり、いまとなつては高校時代への郷愁をとまなう。

『輝ける闇』(1968)は、開高健が朝日新聞臨時

特派員としてベトナム共和国(南ベトナム)軍に従軍し、最前線で突如始まった戦闘で九死に一生を得た経験をもとに、生と性への執着、脈絡もなく訪れる死を描き切った小説である。サントリー宣伝部員として、名コピー「人間らしくやりたいナ」を生み出し、『裸の王様』(1957)で芥川賞を受賞した開高健の博識・豪筆による描写から、全ページにベトナムの湿熱の漂いが感じられる。

戦場で瞬時に来たる死の恐怖は、生の儂さを覚醒させ、『夏の闇』(1972)の「私」を終日惰眠に浸る虚無、鬱状態に陥らせている。死に近い惰眠と生のための食事以外は、「女」との乾燥した性に埋没させる。偶然に接した「ベトナム戦争の終焉近し」の報道によって、「私」は覚醒し、虚無の日々を捨てて、熟れきった暑熱のベトナムにふたたび行くことを決意する。覚醒した身には、惰眠、食事、性も、纏わりつく惰性となる。それを振り払う決意が芽生え、胎動が起こりつつある「私」の姿を、「入ってきて人生と叫び、出て行って死と叫んだ」という突然の挿入で表現している。一点に意識が収束し、禅的悟りの炎を生じさせる。圧巻である。

高校生のころに初めて読んだときの感慨がどのようなものかは忘却の彼方、今は連続した2作品によって、ベトナム戦争、東西ドイツを借景に、生、性、死を描いていると感じる。古い作品となってしまったかもしれないが、「人間らしくとは」、「また「生とは」、を表現した傑作であると思うとともに、文学は音楽とは異なる、絵画とも異なる、科学の彼岸にある芸術であるということ改めて知らされる。

臨床薬学分野 教授 西口 工司

百田尚樹著 『永遠の0(ゼロ)』 講談社 2009年

約2年前の出張の折、新幹線に飛び乗る直前、タイトルに惹かれて何気なく購入した一冊です。ところが、読み進めると心を洗われるような感動と素晴らしい人間に begegnete 気持ちになれる一冊であり、あっという間に読み終えてしまいました。是非、一読されることをお勧めしたいと思います。なお、映画化されて、2013年末にロードショーとなりました。さらに余談ですが、百田尚樹氏は、テレビ番組「探偵ナイトスクープ」を企画する放送作家としても活躍されているようです。

まず、「永遠の0」の「0」とは?太平洋戦争で活躍した海軍零式戦闘機「零戦」のことです。いまや太平洋戦争で日本が敗れたことすら知らない方のいる世代に「零戦」といってもピンとこないかもしれ

ません。しかし、戦争や零戦を知らない方でも、この物語による素晴らしい感動が心を包むことは間違いないと思います。また、なまじの歴史本などより、興味深く戦争の経緯とその実態を教えてくれる点でも実に優れた作品だと思います。

次に、肝心な物語の内容についてです。4年連続で司法試験に落ちて人生の目標を失いかけている26歳の佐伯健太郎と、仕事と結婚の狭間で人生の岐路に立つフリーライターの慶子（姉）が、太平洋戦争で戦死した宮部久蔵（祖父）のことを調べはじめるところから物語が動き出します。物語は宮部久蔵の謎の人物像を戦友たちの証言によって、また姉弟の個々の心情を交えて明らかにしつつ、太平洋戦争の実情も鋭く暴きながら、大どんでん返しでクライマックスを迎える終末へ疾走していくという流れです。読み進むほどに宮部久蔵という真の勇士が次第に浮かび上がってきます。

昨今、他人に多くの責任を押し付け、利己主義が堂々と罷り通る現代と比し、男らしさとは何なのかなど、太平洋戦争中に宮部久蔵がとった行動を通して様々な問いかけが聞こえてきます。

一般教育分野 准教授 野崎 亜紀子

オルダス・ハクスリー著（黒原敏行訳）『すばらしい新世界』 光文社古典新訳文庫 2013年

近未来、人は生まれながらにして一定の階級の下で生活をしています。それぞれに相応しい教育を受け、それぞれに相応しい職業に就き、苦しさやストレスを感じることなく、幸せな人生を送っています。相応しいパートナーを得て、相応しい子どもを産む。

相応しい子ども？

そうです。子どもは国営の〈孵化センター〉でその身に相応しい遺伝子を与えられ、作り出されるのです。子どもは各々の階級の下で相応しい人生を送ることが出来るように、その人生に疑問を抱くことのないように、〈条件づけセンター〉で教育を受け、大人になります。その社会に生きる誰もが、ストレスを感じず、苦しみを覚え、疑問を持つことのない世界。

著者であるオルダス・ハクスリーは、著名な生物学者を世に送り出してきた英国ハクスリー家の一員です（祖父のトマス・ヘンリー・ハクスリーは、ダーウィン進化論を支持した生物学者、兄のジュリアン・ハクスリーもまた同様に進化生物学者でありイギリス優生学会の会長も務めました）。彼は1932年に、この世界を《すばらしい新世界》として描き出し、この《すばらしい新世界》に疑問を抱いてし

まったある若者の、ある破滅的な物語を描きあげました。誰もが皆苦しみや疑問を感じることはない、否、感じることを知らず、感じるすべを持たないこの恐るべき世界を。彼は生物学の状況を理解し、自分の生きる世界の未来に、この恐るべき《すばらしい新世界》の到来を察知していたのでしょうか。何という慧眼。何という想像／創造力。

翻って、私たちの生きる現代の社会はどうでしょう？

望んでもなかなか子どもを得ることの出来ないカップルには、様々な医療技術が準備され、受精卵や胎児の状態は早い段階で明らかになる、そういう社会に私たちは生きています。しかし、この社会は《すばらしい新世界》とは違う、少なくとも本書の紹介者である私はそう考えます。様々な苦しみを抱える人たちに、何とか応えたい。未知の世界を何とか切り開いていきたい。そうした数々の困難や願いに向かって苦闘する中に、今の私たちの社会がある、と思われるのです。

しかし、それでもなお、今ある社会の状況は、この《すばらしい新世界》と何が違い、そして何が似ているのでしょうか？

私たちの今とこれからを想像し、創造する一冊になることでしょう。

一般教育分野 講師 坂本 尚志

永井均著 『マンガは哲学する』 岩波現代文庫 2009年

時として哲学者は、「火星人とのコミュニケーションはどのようなものか」や、「もし国家や法が存在しなければ人間はどうふるまうか」などといった極端な例を持ち出すことで、議論の本質を示そうとする。しかし、こうした仮定が複雑になっていくと、議論は錯綜し、わかりにくくなる。言語で表現されるという性質上、思考にはどうしても越えられない限界がある。たとえば蝶結びを文字で説明することの煩雑さ、むなしさを考えてみればよくわかるだろう。

永井均がこうした言語の限界にあらがうために本書で行ったのは、「マンガの哲学」を提示することである。マンガは、荒唐無稽な想定や言葉では説明しえない状況を、一枚の絵、一ページのコマの連続によって描き出す。マンガ以外のどのような手段によって、先祖の失敗を取り返すべく、子孫がネコ型ロボットを過去へと送り込むような状況を読者に納得させ、その行く末に興味を抱かせることができるだろうか。

本書の中心にあるのは、永井が一貫して考えてき

た「わたし」とは何かという問いである。この「わたし」は、さまざまなマンガの中に、過去の自分として、憎むべきあるいは愛すべき他者として現れる。「わたし」は、意味の過剰や欠如の中に放り込まれもする。哲学という視点から眺めると、マンガはまさに哲学的思考実験の場なのである。もちろんこのことは、すべてのマンガが哲学的であるということの意味しないし、マンガは哲学的に読むべしと決めつけるものでもない。むしろ、今や世界的な広がりを持つマンガというジャンルが持つ可能性を、哲学という媒介によって明らかにしたのが本書である。初版から20年が経ち、最近の作品はフォローされていないものの、読みの面白さは色あせていない。現在も哲学しつづけるマンガを読み解く手がかりとして、そして哲学的思考へのいざないとして、ぜひ読んでほしい一冊である。

図書館

森本武利編著（酒井謙一訳）『京都療病院 お雇い医師 ショイベ ～滞日書簡から～』 思文閣出版 2011年

いしずえ
本学創設の礎となったドイツ人教師レーマン（Lehmann Rudolph, 1842-1914）とショイベとの交流を知ることができる本です。お雇い外国人レーマンや、日本におけるドイツ語教育の先駆者レーマンについて著された研究書などがありますが、京都で親しく交流したショイベが、そのときのレーマンを

直に著しているという点において、研究書や業績を綴った本からは得られない、レーマンのふだんの姿が伝わってくるようです。

ショイベ（Dr. Bitho Scheube, 1853 - 1923）は医学博士で、1877年（明治10年）に京都療病院に外国人医師として招聘され、京都府立医科大学創立の基礎づくりに貢献しました。当時の京都は、東京への遷都により、人口が激減し経済的にも減衰しつつあった時代で、同じドイツ人化学者ワグネル（Dr. Gottfried Wagner, 1831-1892）、ドイツ語教師レーマンの仲良し3人組としてお互いに近くに住居を構え、頻繁に交流し、支え合いながら活躍しました。

この本はショイベが故郷の母に宛て、ドイツ出発（1877年）から帰国（1882年）までに近況報告として書いた111通もの書簡をまとめたものです。京都の生活習慣、四季折々の情景、気温や湿度などが詳細に記載され、さらに病院での診療や講義のこと、通訳や使用人のこと、自宅の様子、祇園祭や秋祭り、博覧会等のイベント、府知事や役人との折衝、セレモニーでのエピソード、ドイツ総領事や貿易商社との交流、ドイツ人仲間との会食や行楽、旅行中に見た日本各地の姿など多岐に渡り、当時の日本の姿をとても素直な視点で客観的に表現しています。

また、ショイベが京都で最初に落ち着いたのがレーマン宅であったこと、神戸への旅行や食事、散歩など、当時の両人の交流を窺がえる記載も多く見受けられます。今年はレーマン没後100周年に当たります。是非一度読んでみては如何でしょうか。

この本は当大学図書館2階書架にあります。

コトバの「豆クイズ」～漢字編1～

（出題者 鈴木 栄樹）

今では、カタカナで書くことの多い国名や都市などの地名ですが、明治・大正時代には漢字で表記されることも普通でした。今年の本学創立130周年という記念すべき年で、これは1884(明治17)年に私立京都独逸学校が創設された年から起算しているわけですが、「独逸」をドイツと読むことはご存知ですね。和独辞典の「独」もこの表記からきています。ほかにも、アメリカ=米、イギリス=英、フランス=仏、イタリア=伊、スペイン=西、ロシア=露、インド=印などの略字は普通に使われています。これらは、それぞれ米利堅（メリケン、亜米利加とも表記）、英吉利（エゲレス）、仏蘭西（フランス）、伊太利（イタリー）、西班牙（スペイン）、露西亜（ロシア）、印度（インド）の頭文字になります。

では、次の国名（①～⑧）・都市名（⑨～⑯）はどこでしょうか？（解答は22ページに掲載）

- | | | | |
|------|-------|-------|-------|
| ① 瑞典 | ② 白耳義 | ③ 葡萄牙 | ④ 土耳古 |
| ⑤ 埃及 | ⑥ 比律賓 | ⑦ 越南 | ⑧ 墨西哥 |
| ⑨ 紐育 | ⑩ 華盛頓 | ⑪ 倫敦 | ⑫ 牛津 |
| ⑬ 劍橋 | ⑭ 伯林 | ⑮ 桑港 | ⑯ 安特堤 |